「鶴居村の教育」発刊に寄せて　～連携を自分ごとにしよう～

鶴居村教育委員会教育長　村上明寛

鶴居村の教育が充実・発展するうえで重要な役割を担う鶴居村教育研究所が、令和３年度の活動の成果をまとめた研究紀要「鶴居村の教育」を発刊されますことに心からお祝いを申し上げます。

また、鶴居村教育研究所におかれては、本村学校教育全般にわたる調査研究、教職員の資質向上に取り組まれるとともに、教育委員会と一体となって学校教育の推進に寄与していただいていることに、感謝と敬意を表します。

さて、昨年度のこのページに「チャレンジ‥そのキーワードは『連携』です。」と書きました。小中連携をイメージしながら、その難しさにも触れ、令和３年度は、まず「きっかけづくり」を行い、それを契機に様々な「連携」が進むことを期待しました。その「きっかけ」として、道教委の「学校力向上に関する総合実践事業」の地域指定を受け、先生方に取組をお願いしてきたところです。

私は、教育行政の仕事に長く携わってきましたが、大別して今、二つ目の組織（鶴居村教委）に所属しています。所属を移るときには、当然大きな変化があります。前の組織では組織としての「らしさ」が求められ、経験を重ねてそれが身に染みついています。同じ経験の中で育った人の集団だからそこに「文化」や「風土」が生まれ、それも身に染みついています。そしてその「文化」や「風土」に沿った「ものさし」で物事を判断するようになります。組織を移行するとどうなるか。新しい組織にも「らしさ」や「文化」・「風土」があり「ものさし」があります。加えて、気候や環境、人間関係も変わる。先生方も同じですよね。市町村をまたいで異動すると、そこにはその学校の「伝統」があり「職員室の風習」もあるのではないでしょうか。地域の「気質」もあるでしょう。

教育行政でも教育活動でも、場所や組織が変わってもすべきことは同じなので、その進め方とか仕様とかが揃っていれば、環境が大きく変わっても、実務的にも気持ちの上でも負担軽減できるはず。負担が軽減できれば、その分、環境にもなじみやすく、求められる「らしさ」にもアプローチしやすくなるはずです。

転じて、小学校（小学生）から中学校（中学生）への進学（移行）に置き換えるとどうか。一般的には、小学校には小学生「らしさ」、中学校には中学生「らしさ」という求めるものがあって、教師の指導方法もその「らしさ」へのアプローチに沿って行われるから、授業スタイルや言葉遣い、子供や保護者への情報提供の質・量に差が生じてくると思います。「らしさ」は求める児童・生徒像であり、学校経営方針の根拠や学校教育活動の目標です。発達段階で違うのは当然です。でも、転勤のたびに私たちや先生方が苦労するのと同じように、子供たちも「らしさ」の移行に苦労（負担）しているはず。もちろん個人差はあるけれど。

そうした子供たちの「負担」をやわらげ、「らしさ」の移行に円滑に対応できるよう、揃えることができるものは揃える。それが「小中連携」の第一歩だと思っています。そして、まず揃えるものは「形」と「ものさし」だと私は思います。「形」は授業スタイル。「ものさし（判断基準）」は６０センチのものさしと３０センチのものさしを小中それぞれが使うのではなく、９０センチのものさしをみんなで使ってほしいということです。

今年度、学校力向上に関する総合実践事業を通して、教員の皆さんの間で「つるいスタンダード」が共有され、実践に踏み出したことは大きな成果であり、うれしい限りです。次年度は、こうした「連携」を各自がさらに実践に落とし込み、深化していくことを熱望しています。すべては、「鶴居の教育」の質の向上のために。そして鶴居村の子供たちのために。